式辞

社日桜のつぼみも膨らみはじめ、春の訪れを感じる頃となりました。

本日ここに、島根県立情報科学高等学校第３２回卒業証書授与式を迎え、ただ今、８９名の皆さんに無事、卒業証書を渡すことができました。卒業生の皆さん、そして保護者の皆様、誠におめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策とはいえ、学校行事の中でも最も重要な卒業式を、参列者を限定し、このような簡素な形で行わざるを得ないことを大変残念に、また誠に申し訳なく思っております。在校生はおりませんが、私たち教職員一同、卒業生の門出を精一杯祝いたいと考えておりますので、どうかご理解のほどよろしくお願いいたします。

さて、本校は今年度、文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、「地域との協働を通じたデジタルイノベーション創出人材の育成」をテーマに取り組んで参りました。卒業生の皆さんはその中心的な役割を担い、自分たちの持つデジタルテクノロジーを有効に活用し、地域の課題に果敢にチャレンジしてくれました。昨年の１２月にオンラインで行った「情報 IT フェア」はその象徴的なものであったと感じています。コロナ禍にあり、様々なイベントの開催が中止される状況の中、情報科学高校らしい開催の仕方を工夫し、実行できたのは、卒業生の皆さんがこの学校で培ってきた「気概」の賜であったと思います。

現代社会に目を向けますと、IoT、ロボット、人工知能、ビッグデータといった社会の在り方に影響を及ぼす新たな技術が革新的に進んできています。一方では、人口減少や少子高齢化、地域間格差という社会的な課題も多く生じています。

このように変化の激しい現代社会にあって、次の時代を担う皆さんに求められるものも

大きく変わりつつあります。直面する課題を解決していくための課題解決能力、そして新たな価値を生み出していく創造力、未知なるものに果敢に挑んでいくチャレンジ精神は間違いなく新しい時代に求められるものであろうと思います。

こうした力は、まさしく皆さんがこの３年間本校で培ってきた力そのものであります。皆さんは、情報やビジネスに関する高い専門性を活かすとともに、様々な体験や地域の皆様との交流を通してこの安来地域の、島根の、そして日本の課題を見つめ、その解決のために様々なチャレンジをしてきました。しかし、うまくいかなかったこともたくさんあったでしょう。思うようにならず苦しんだこともあったでしょう。

直木賞作品である恩田陸さんの「蜜蜂と遠雷」には、次のような一節があります。「何かが上達する時というのは階段状だ。ゆるやかな坂を上がるように上達する、というのはあり得ない。ピアノを弾けども弾けども足踏みばかりで、ちっとも前に進まないときがある。これがもう限界なのかと絶望する時間がいつ果てるともなく続く。しかし、ある日突然、次の段階に上がる瞬間がやってくる。なぜか突然、今まで弾けなかったものが弾けることに気付く。それは、喩えようのない感激と驚きだ。」これは、誰しも苦しいときがある。しかし、決してあきらめてはならない。希望を捨てず、耐えて努力を続ければ必ず道が開ける。と我々に教えてくれています。課題解決能力、創造力、チャレンジ精神、どれも重要な力ではありますが、「あきらめない」ということは何よりも大切なことだろうと思います。

皆さんは本校で学んだ３年間で情報やビジネスに関する高い専門性はもちろん、「明朗、気概、思いやり」という本校の校訓のもと、常に自分の心に正直で、新たな一歩を踏み出す気概を持ち、目の前に困っている人があれば手を差し伸べる、そんな思いやりを持つ人

に成長してくれたと信じています。

コロナ禍で人と人とのつながりが希薄になる中、この校訓は、これからの社会を生きていくまさに指針であろうと思います。

　結びに卒業という人生の節目となる今日、皆さんを支えてくださった保護者の皆様をはじめとする多くの方々への感謝の気持ちを忘れることなく、またふるさとしまねへの思いを胸に、情報科学高校で頑張ってきたという自信と誇りと情熱を持って新たな世界に向かってほしいと願っています。みなさん一人一人が、我がふるさと島根の、そして日本の輝ける星となることを心から祈念し、式辞といたします。

令和３年３月２日

島根県立情報科学高等学校長　佐藤睦也